

教 育 長 様

校番 009 尾道東 高等学校長

**「高等学校課題発見・解決学習推進プロジェクト」に係る研究開発校
平成30年度 報告書****研究の概要**

研究の目標（※計画書に記載したものを再掲）

社会問題に関心を持ち、学校から一歩外へ出て多様な人々と交流していく中で、自ら課題を設定し、他者と協働して解決策を探究し、提案することができる「資質・能力」を身に付けた生徒を育成するという視点に立ち、本校で付けたい「資質・能力」のうち、特に1年生で付けたい力を育成するための指導法・評価方法を確立する。

研究内容（※対象、時期、方法を含む）

○総合的な学習の時間等における「探究的な学習」の充実について

【1学年】

1学年では、地域を知る「尾道ひと模様」の作成を中心に指導法・評価方法の研究を行った。「尾道ひと模様」とは、歴史や文化、芸術、観光など様々な分野で活躍する尾道ゆかりの方々へのインタビューを行い、尾道の魅力を英語でまとめた冊子である。生徒に、「自分たちが暮らしている地域で生まれ、継承されてきた文化についての理解を深め、それらを、責任を持って次世代に繋ぎ、広く発信することができる力」を身に付けさせることを目的として作成している。

これまで、インタビューを行った後、冊子作りのためにパソコンを使ってページ作成をし、冊子にして終了していた。今年度はそれらの活動に加えて、それぞれのインタビューに共通する項目を検討・整理したうえで、それをポスターセッションで共有し、世の中の職業人からのアドバイスを踏まえて自らの進路目標を作成するという活動を加えた。

また、マンダラートやマトリクスなどの思考ツールを用いて内容を整理する活動を單元ごとに取り入れるなど、思考ツールを用いた整理を実践させた。

【2学年】

今年度は1学年の「探究的な学習」の充実を図ることを中心に研究を進めてきたが、来年度に向けての準備として2学年の総合的な学習の時間においても取組を行った。2学年では「模擬国連 at 尾道東」を実施し、試行的に指導法・評価方法の研究を行った。

「模擬国連 at 尾道東」とは、国際問題に関心を持ち、理解し、その解決策の探求を促進する態度を育成するとともに、豊かな国際感覚を持って未来の国際社会・地域社会に貢献する人材を育成することを目的に今年度から始めた取組である。今年度は「水問題」を中心に、各グループで担当国を決め調査を行った。実際に調べた内容は修学研修旅行において大使館を訪問し、大使館職員に対して「当該国が抱える水問題、その原因、解決方法」などをプレゼンテーションし、実情等を踏まえたコメントをいただいた。そして、世界における水問題にさらに深く考えていくため、京都大学等の学生を招きファシリテーターとなってもらい、「水の人権」について各国の立場に立ち解決策の提案や交渉を行う活動を行った。そのような活動を通して、水問題以外にも含めた当該国が抱える問題を解決するために、他国へ呼びかけたい内容を、ポスターを用いて発表し、世界全体における問題点の整理を行った。

3月13日には1学年の生徒も含めて校内において「模擬国連」を行い、世界における問題と高校生である我々が取り組んでいくべきこと、自分たちだけでは解決できないが世界的には必ず解決していかなければならないことについて議論した。

また、3月16日には、これらの学習内容を本校生徒と尾道市内の中学生で議論を行う機会として、「Onomichi Higashi Global Youth Leaders Assembly 2019」をグリーンヒルホテル尾道で開催し、活動を広げていく。

○資質・能力の評価について

本校では、学校全体で重点的に育成する資質・能力についてカリキュラム・リデザイン・センター（以下 CCR）による「CCR の枠組み」を使って整理し、「創造力」「批判的思考力」「コミュニケーション力」「協働する力」の4つを定めている。そして、これらの土台となる「思考力」と「コミュニケーション力」について、本プロジェクトにおいて研究を行うこととしている。

今年度は「思考力」の整理を中心に行い、本校における思考力の下位項目として次の7つを設定した。

- ① 分類・整理する力
- ② 比較する力
- ③ 予測する力
- ④ 類推・仮定する力
- ⑤ 創造する力・新しい提案をする力
- ⑥ メタ認知する力
- ⑦ 理由づける力

しかしながら、すべての学年ですべての資質・能力を育成し、それを評価することはできないと判断し、1学年では「① 分類・整理する力」「② 比較する力」を、2学年では「③ 予測する力」「④ 類推・仮定する力」を、3学年では「⑤ 創造する力・新しい提案をする力」「⑥ メタ認知する力」を特に育成したい力として設定した。なお、「⑦ 理由づける力」については、そのほか全ての資質・能力に大きく関係するものであるため、3年間を通じて育成したい力として整理している。

以上のことから今年度は1学年において「①分類・整理する力」「②比較する力」「⑦理由づける力」についての評価を行った。

「分類・整理する力」については、1年間の振り返りシートの中で、「今年1年間を振り返って、身についたと思う力を書き出す」という活動の中でマトリクスの中に自らが身についたと思う力を考えて整理できているか否かという観点に基づき評価を行った。

「比較する力」については、入学当初に「これからの高校生活について考えてみよう」という活動の中でマンダラートを使ってなりたい自分について記入をしていた。3月に再び同じ内容のマンダラートを書かせ、両者を比較し、これからの自分がすべきことや、比較して分かったことが書けているかどうかといった観点に基づき評価を行った。

「理由づける力」については、尾道ひと模様におけるポスターセッション後のまとめワークシートにおける、「将来、あなたは職業人・社会人としてどのように貢献したいか」という問いに対して文章を書かせ、インタビューやポスターセッションを通じて学んだことを根拠にして、文章を組み立てられているかという観点に基づき評価を行った。

今年度の成果と次年度の課題（※仮説の検証を含む）

【成果】

① 学校全体で育成すべき「思考力」の整理とその実践が行えたこと

上記のようなルーブリックが完成したことによって、学校全体で重点的に育成したい資質・能力について本校職員が内容を知り、理解ができたことは大きな成果である。また、総合的な学習の時間にとどまらず、普段の教育活動においてもこれらの力を育成したいとの思いから、公開授業研究会においてもこれらの力を育成するための授業づくりについて研究を行ったり、相互授業観察においてもこれらの視点に基づく授業づくりを全教員で行ったりすることができた点が大きな成果である。

② 来年度の「探究的な学習」に向けての土台作りをすることができたこと

①で述べたように、日常の各教科・科目の授業においても、資質・能力の育成を踏まえた授業づくりが行われており、このような授業に生徒が参加することによって、より深い資質・能力を身に付けることができると考えている。そのような方向性を示すことができるとは来年度につながる大きな成果である。また、2学年の総合的な学習の時間において、模擬国連を実際に試行することにより、日程や内容などについて実践の中で課題を見つけることができた。このような課題を修正することで、来年度の総合的な学習の時間の充実を図ることができると考えたことから、この点についても今年度の成果と言える。

【課題】

① 評価の方法の徹底

年度当初は、生徒の成果物について職員会議等を通じて教職員全員で評価を行い、その周知を図る予定であった。しかしながら、どの成果物を用いるのか、どのような観点に基づき評価を行うのかといった詳細を詰めることに時間がかかってしまい、結果的に1学年の担任・副担任・学年付で分担して評価を行うことになってしまった。このままでは、直接関係しない学年に所属する教職員に取組内容を説明することができないため、来年度に向けての大きな課題である。また、今年度は3つの資質・能力についてのみだったためその力を測ることが容易であったが、来年度はそれらの資質・能力に加え、「予測する力」「類推・仮定する力」も加えて評価していくことになる。今年度のように、3月にまとめて評価を行うことは難しいため、年度当初に評価計画を立て、いつ、どのような取組を行って、どの資質・能力を評価するのかといった詳細を整理し、進めていく必要があると考える。

② 生徒への周知

今年度は、教職員向けに教科主任会議を通じて、取り組み内容の説明や、ルーブリックについての周知を行うことができたが、生徒は7つの資質・能力についての詳細を知らないままに1年間が過ぎてしまった。現在、各クラスに掲示する資質・能力の整理表を作成しており、来年度は年度当初に説明を行い、授業も含めた教育活動でこれらの資質・能力を意識させる場を増やしていきたい。

③ 「コミュニケーション力」のルーブリックの完成

本校では学校全体で重点的に育成する資質・能力の土台となるのが「思考力」と「コミュニケーション力」と整理している。「思考力」についてはルーブリックを作成し、その下位項目を整理することができたものの、「コミュニケーション力」についてはいまだ検討中である。これについても下位項目を整理したうえでルーブリックを作成し、実用できるレベルに持っていくことが来年度以降の課題である。また、学校全体で重点的に育成する資質・能力を学年・学期ごとに段階的に育成していけるよう、「カリキュラムマップ」づくりを行っているが、いまだ完成していない。「カリキュラムマップ」を作成していくことによって、教科横断的な資質・能力の育成につながると考えており、こちらも来年度以降の課題である。

④ 研究の仮説の検証について

本プロジェクトにおける本校の研究の仮説は、「現在設定している4つの「資質・能力」を支える思考力・コミュニケーション力を分析・構造化し、各学年、学期ごとに段階的に「重点的につきたい力」を設定し、その育成に向けて教科横断的に授業研究を進め、評価を適切にフィードバックしていくことで、生徒が自ら課題を設定し、他者と協働して解決策を探究し、提案する力の基盤を作ることができる。」である。これに関しても1年間で測ることができるものではないため、3年間を通じてこの仮説の検証を行っていきたい。